

『古事記』には一―三首の歌があり、『古事記』の六十場面のうちおよそ六割が歌を含む場面である。歌が多い時代は『古事記』に占める分量も多い。

序文に従えば、『古事記』の撰述の目的は「邦家の経緯」（国家組織の根本）と「王化の鴻基」（天皇徳化の基礎）とされる。ならば各天皇の時代にそれぞれ何がなされ、何が問題になったのかという事績が必要である。しかし記述の多い時代、すなわち歌の多い時代において事績は散文で数行書かれているだけである。その上、歌でしか語られない記述が『古事記』には多々見られる。

そこで本論は、歌が十首以上ある初代神武（第二章第一節）、十二代景行（第二章第二節）、十五代応神（第二章第五節）、十六代仁徳（第三章第一、二節）、十九代允恭（第三章第三節）、二十一代雄略（第二章第三節）の時代、一方で最小一首の歌をもつ十代崇神の時代（第二章第四節）、さらには『古事記』最後の歌が収録される二十三代額宗の時代（第四章第一節）を取り上げ、歌を中心に『古事記』の歴史（「現代」の天皇を中心とした秩序や体制が成立していく過程）を読み解いた。

研究史を踏まえて「歌が語る歴史」を証明するため、以下の読みの方法をとった。歌は直接的に歴史を語っているわけではなく、歌の読み方、位置づけ方が問題になるからである。

一、歌自体の表現分析（第一の読み）

二、その分析の上に立って、歌の前後の文脈の中（場面）に歌を置いて読む（第二の読み）
三、各天皇条、さらに『古事記』全体の時間軸の中で歌を位置づける（第三の読み）

―第一、第二の読みを踏まえた上での、『古事記』全体での新しい読み

この三段階の読みによって『古事記』の歌が語る歴史を示し、『古事記』に多くの歌のある理由を明らかにした。いわゆる抒情詩的な歌からも歴史を導くことを可能にしたのである。

一方、第一の読みがあることによって必然的に文学史にも言及することになった。主として『古事記』仁徳時代の主題と皇后イハノ姫像から『万葉集』巻二相聞巻頭歌への流れと『古事記』雄略時代の主題と雄略像から『万葉集』巻一雑歌巻頭歌への流れを考察した。また仁徳の時代に理想婚（神話的な結婚）とされる庶妹との結婚（恋愛）が一度否定され、さらに允恭の時代に同母兄妹の近親相姦による悲劇が歌謡物語によって語られることになって、神話的な呼称である「妹」が途切れ、歌語としての「妹」の確立が導かれることを論じた。これは歌語への展開を意味している。

神話的な呼称の途切れは、額宗の時代に神話伝承を遠ざける序詞の働きが示され、歌と伝承が分離し、歌と物語がそれぞれ自立していくことを歌謡物語が語っていることと関係する。また允恭時代の同母兄妹の悲劇の物語では、歌謡から短歌体（和歌）への歌体の展開も見られる。これも万葉歌へ向かう過渡的なさまを示している。

歌語としての「妹」、神話伝承を遠ざけ序詞が成立するという点から、第四章第二節では「妹」の枕詞（序詞）について論じた。さらに枕詞（序詞）は和歌そのもの問題であり、『古今和歌集』が安積山を「歌の父母」と位置づけている歴史の問題であることから、同第三節において手習いの歌について考察した。本節では都の文化が地方へ伝えられるさま、また手習いによって歌のみならず都の文化を身につけることになると論じた。

このように歌を中心にすることによって文学史を辿ることもできた。